
容疑少女

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

容疑少女

【著者】

Z6134D

【作者名】

ゆづ

【あらすじ】

学校に退屈している中学生アミはいつものように友達から一通のメールを受け取るが…そのメールが彼女の運命を左右することになる。

(前書き)

「J感想をお待ちしておつまみ（^-^）

学校、友達、つてなんなんだ？

騒然とした教室で時々、脳みそをそんな疑問がかすめる。

毎日、学校が終わるとお決まりのプリクラを撮つて「一生友達」とか「男より友情」とか画面をペンで書き殴つてハートに星にキラキラ文字で埋め尽くして。

大して可愛くもないのにモデルとおんなじポーズしちゃつたりなんかして。

そんな風に名刺みたいに友情の「証」を持つてもアッサリ簡単に裏切つたり裏切られたりするんだ。それが世の中を上手く渡る方法、そう教えられて育つた。

友情つてそんなに目に見える程に軽くて儂いの？滑稽すぎて笑うしかない。

皆は毎日楽しそうに前歯を見せながらめいっぱい笑つてゐる。でも私はつまらないと思つ。学校は。だからあんまり笑わない。よく笑わないね、つて言われるし。

特に許せないヤツがいる。いつも私を呼び出してはセクハラしてくるオヤジ。

あいつの言う事なんか聞きたくもないのだけど、いつも成績を下げると言つてくる。抵抗しない私のことが「お気に入り」らしいのだ。こないだは腰を触られた。数学のエロ教師だ。いつか絶対痛い目に会わせてやる。そう思った。

今日は久しぶりの土曜日だ。たつた7日間が経つてまた土曜日つていう日が来ただけなのに、何だかとても久々に感じる。

昨日の夜から机の上に置きっぱなしのケータイを見ると、もう11時だった。

今日は天気がいい。真冬の晴天だ。カーテンを開けると、私の部屋

を光が覚醒させる。目を細め剥き出しになつた眩しい太陽を見つめた。冷たく冷えた窓には温度差のせいで水滴が付いている。

私の部屋にある買つてもらつたばかりのステレオに中古で買つたミスチルのCDを入れて、暫くまた寝る。まだ温かい布団に潜り込んで日ごろの疲れを癒すことにした。

数分経つただろうか。うとうとと意識が遠のく中ケータイのバイブ音が聞こえた。私はケータイを取る。

(Kカラオケに来て 話あるから)

送信者は佐賀恵美だつた。私の同級生だ。今年は私たち中3年生は受験だが、彼女はすば抜けて頭が悪かつた。一人ではなにも出来ないタイプだ。しかも相当な男好きなので、たちが悪い。よく先輩からいじめられていた。

この人とも私は上辺だけの友情で何度もプリクラを撮つたことがある。

私は佐賀恵美からの突然のメールがよく解らなかつた。Kカラオケというと昔良く友達と行つた怪しいカラオケ店だ。最近は全く行かなくなつてしまつた。

数秒間そんなことを考えていると、直ぐにまたメールが届いた。(ゴメン、アミ。今のメール送る相手を間違えたの!)

(Kカラオケがどうしたの?)

(なんでもないよ…またメールする)

と来た。

私はそのメールのせいで完全に目が覚めてしまった。
暇だし、寒いけど私も街に出てみることにした。

X-mas前の街は外灯や店が華やかに飾られていて、人々はひとりひとりがその人の「X-mas物語」の主人公になる。

木は普段は見向きもされないがその短い時だけ華麗に主役になれる。まるで売れなかつたが人々の視線を集め急に輝きだすあか抜けた女優だ。

家の中も、街も、テレビの中も、CMも犬小屋ですらX-mas一

色になつてゐる。雪が降ればホワイト X - mas のいつちょうあがりだ。

そして毎年思う。私はキリスト教じやないのにな、と。日本人は不思議だ、と。

恵美は誰かと用事があるのでどう。もし今カラオケへ行けば、合流出来るかも知れない。とりあえず、なんとなく、私はそのカラオケへ行つてみることにした。

人で溢れかえつた街をスポーツ選手のように巧く泳ぎ、目的地へと向う。

しかしある一定の道に出ると人の列は途切れた。

ホテル街。カラオケはそこにあるからだ。

ちらほらとラブラブなカップルが X - mas 前を満喫する中で私は独りウロウロと道を歩く。

あつた、Kカラオケ。相変わらず地味な看板は付いている。昭和風の押して開ける丸い取つ手の黒いドアは中が見えない。キイ…と音をたて中へと入る。

入ると中は誰も居なかつた。受付のカウンターはホコリが被つていて、明らかに何の気配もなかつた。

血の色のようにふかふかの赤いソファはコーヒーのような黒い染みが付いていて、千切られた様に綿が出ててしまつてゐる。ホコリも被つていて、何とも汚ならしい。

恵美はこんなところで何の用があるのでう。

私は進んでみると、一室一室のカラオケの機械や道具が「つそりと無くなつてゐることに気づく。

すると女の怒鳴り声が聞こえた。

「バカヤロお！やつぱり浮氣してゐんじやねえかよつ

「……」

恵美の声だつた。廊下からドアの隙間を見ると、恵美の恋人らしき男と、彼女が居た。

まさに修羅場だつた。

私が入つていい隙もないし、その空気ははりつめていて、恵美は殺氣立つていた。近づいてはいけないと私の本能は感じた。すると男がよつやく冷静な声を保ちながら、という感じで言い放つた。

「もう、君とは付き合えないよ」

私は声だけで恵美の表情を感じ取つた。

泣いた眼を瞳孔を丸く開き暫く黙つている、のだろうか。

「…ぐつ」

ドサリ。

そんな音が聞こえた。私は無意識に隙間を覗くと、そこには血にまみれた細長い果物ナイフを持つている恵美が居た。

計画的な犯行だつたのだろう。

手は指紋がつかぬようにか手袋をしている。スマイルのワッペンの付いたピンク色の手袋は、血を吸つていた。恵美は立ち去りし彼を見つめている。微かに震えていた。

私は視界の隅に、ドアの開いた一室を見たのでそこへ直ぐに身を潜め隠れることにした。

恵美はナイフを投げ棄てるところから走つて来た。

私もその部屋を目指し走る。

…が。

プラスチックの破片が、私の足を滑らせたのだ。私は転倒した。恐る恐る上を見上げると恵美が私を見下ろしている。彼女の涙が、私のおでこに落ちた。

私は殺される、と思いギュッと眼をつむつた。

しかし恵美は、そのまま泣き崩れた。

私は頭の中が混乱していた。しかしその中でも恐怖が大半を占めていた。

私は泣き続ける恵美をよそに出口を目指し走つた。

その衝撃は相当なものだった。私は家に帰ると食事も摂らず歯も磨かず直ぐに布団に潜つた。そのまま意識を失つた。夢すら見なかつ

た。

朝、目が覚めると。
メールが13通も、入っていた。私はゾッとした。
別の意味でドキドキしながら、ケータイを手に取る。
(何でもする。何でもするから　このことは誰にも言わないでください)

恵美だつた。

読み終えたが全て似た様な内容だ。

ケータイを持つて家の階段を降りると、なにやら母親が騒いでいる。
もしかして…と嫌な予感がした。

「アミ、見てよこれ。カラオケで殺人だつて。犯人まだ捕まらない
らしいわよ」

「ふ…つ、ふーん」

私は新聞を軽く読むとそそくさと部屋を出た。

そして自分の部屋へ戻る。

充電器にケータイをセットし、返信の内容を考えた。
何でもする…か。

私の頭に一瞬、数学のセクハラ教師、大内の顔がよぎった。
殺人の犯人が= 何でもするということは= ムカツク殺して欲しい
奴は= 大内

という訳だ。

私は返信の内容が決定し、ケータイのボタンをぱちぱちと押す。
(大内を殺つてくれるんなら 誰にも言わないって約束する)
と返信した。

胸の内は不安というよりは期待でわくわくしていた。
(わかった)

次の日、私は計画通り学校には行かなかつた。熱が出てしまつて休
むということで。

午後6時、一通のメールが来た。

（殺したよ）

ドジで頭の悪い恵美はその後直ぐに捕まつた。
大内の殺人容疑で。

まだ恋人の件はバレていないようだ。

私は恵美のケータイから私の存在が漏れない様にサブアドレスを使つていた。

しかし私の犯行に抜かりはないはずだ。

そう思つていたが。

恵美はとうとう私の名を漏らしてしまつたようだ。あの馬鹿。

私は今少年院でこうして作文を書いている。

(後書き)

是非とも「感想くだせーー辛口甘口どんな感想でも嬉しいです...」。

rn

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6134d/>

容疑少女

2010年10月28日03時57分発行